



第17回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

祖父から学んだ働き方

宮崎県・宮崎県立日南振徳高等学校 3年 戸村 咲希

私は、スーパーを起業して町のために働く祖父の背中を、幼い頃から見てきました。いつも赤い軽トラックに孫の私を乗せ、自然に溢れた場所へ連れて行ってくれました。そんな祖父が、私は大好きでした。祖父は、中学校を卒業後、地元を離れて奈良県の精肉店に就職しました。厳しい親方の下、休む暇もなく働いたといいます。独立を夢見た祖父は、その経験を活かして、宮崎県に戻って小さな精肉店を開業しました。売れ残った肉は、祖父が開発した、独自のたれに漬けて販売しました。すると、そのたれの味が評判になり、たれだけを売ってほしいという声もありました。客の声を受け、祖父はたれを商品として販売するようになりました。そのたれは、多くの人に愛されるようになり、今では県内で高いシェアを占めています。その後、経営が厳しくなった精肉店をスーパーへと展開し、今に至ります。その頃はまだ、私は生まれていなかったもので、詳しいことは知りません。しかし、いつも祖母が祖父の話を聞かせてくれました。

私は小学校に入学すると、文字に触れる機会が増え、本が大好きになりました。お昼になると、毎日図書室へ寄って、気に入った本を見つけては借り、一日中本を読んで過ごしました。ある日、いつものように本を探していると、「戸村文庫」というシールの貼ってある本を見つけました。自分には関係ないだろうと思いつつも、その本を借りてみました。帰宅すると、早速母に戸村文庫の本があったことを報告しました。

「知らなかったとね。それはじいちゃんが寄付したお金で買った本よ。」

私はその時、初めて祖父がお金を寄付していることを知りました。それは、私が住んでいる宮崎県の日南市だけでなく、祖父が若い頃に修業を積んだ奈良県の橿原市にも、子どもたちに本を買ってあげるために毎年寄付しているようなのです。興味を持った私は、祖母に話を聞きに行きました。すると、部屋に

飾ってある新聞記事の切り抜きを見せてくれました。そこには、寄付したことによって、市に表彰される祖父の姿がありました。私は驚きを隠せませんでした。子どもたちのために働く、人望に溢れた祖父を、心から誇りに思いました。その日から、祖父のような大人になるのだと決め、周りの人を思いやり、勉強にも励むようになりました。いつからか、私の中での祖父は、ただ大好きな優しいおじいちゃんというだけでなく、目標と尊敬にも値する存在へと変化していました。祖父のことが更に好きになった私は、それ以来、常に祖父と一緒に過ごしたがりました。放課後や休みの日もスーパーの事務所に行ったり、スーパーで祖父を見つけると、駆け寄って抱き付いたりするようになりました。

そんな小学生のある日、祖父が病気で倒れたと母から聞きました。心配ではありましたが、まだ幼かった私は、その深刻さを理解することができませんでした。きっとすぐ元気な笑顔を見せてくれるだろうと信じていたのです。しかし、何度病室へ通っても、その日以来、祖父が笑顔になることはありませんでした。数年間寝たきりだった祖父は、私が中学2年生の冬、静かに息を引き取りました。最期を看取ることができなかったことを、今でも後悔しています。葬儀の時、祖父はたくさんの人に囲まれて、眠っていました。大勢の人が涙していました。祖父のために遠くからやってきた人もいました。祖父の偉大さと、いかに多くの人に愛されているかを思い知らされた瞬間でした。私は、大好きな自慢の祖父と、離れたくない気持ちでいっぱいでした。ふと顔を上げると、涙をこらえて気丈にふるまっている祖母の姿がありました。祖父のことを一番理解しているのは祖母です。今思えば、自分のために、誰かが涙することを望んでいないという祖父の気持ちを、誰よりも早くくみ取って、我慢していたのではないかと思います。祖母は、祖父が亡くなってから、スーパーの代表となりました。祖父が残したものを守るために必死に働いている姿は、とても輝いて見えました。そして、その姿を見て、祖母を支えられるようになりたいという思いが芽生えました。その結果、私は、祖父が亡くなってから数日後、専門高校の商業科に進学することを決めました。

無事、高校の入学試験に合格し、商業科に入学することができました。高校生になってからは、経済や簿記、情報の勉強に没頭する毎日でした。毎月のようにやってくる検定試験は、とても苦しく思えました。日を重ねるごとに学習

のレベルは上がり、検定試験の1週間前になると、毎日の課外授業とその後の自主勉強に取り組みました。それが終わると、急いで部活動に参加し、帰宅してからも、夜遅くまで勉強する日が続きました。それでも、やめたいと思ったことはありませんでした。なぜなら、祖父に近づけることを嬉しく思う気持ちの方が大きかったからです。そんな気持ちをやる気に変えて、1年生、2年生の時は、積極的に難しい検定試験にも挑戦するようにしました。一緒に頑張ってくれる仲間もいたことで、全ての検定に合格して3年生を迎えることができました。私は、祖父に堂々と報告できることを嬉しく思いました。

3年生になると、検定試験の勉強も落ち着いて、実践的な勉強に取り掛かりました。3年生での実践の授業は主に二つあります。

一つ目は、「課題研究」です。名前の通り、自分たちで設定した課題に取り組み、解決策を考えて行動するという授業です。今取り組んでいることは野菜の販売で、まだ準備の段階です。まず、売る野菜を決めるために、複数のお店の前で、よく購入する野菜のアンケートを実施しました。何時間もかけて集めた200枚ものアンケートを集計した後、上位の野菜を夏野菜の一覧と照らし合わせ、販売と育成に適した野菜をまとめました。それぞれの野菜について、良いところやターゲットをブレインストーミングの方法で話し合い、さらに野菜の種類を絞り込みました。これらの取り組みを終えて、即売会を行うための準備の入念さにとても驚きました。ものをうまく売るためには様々な作戦を立てて顧客のニーズを考えることが必要だと分かりました。

二つ目は、「総合実践」です。この授業は、今まで商業科で学習したことを実際の会社形式で実践します。具体的に説明すると、クラスを半分に分けて、日南市場と大阪市場を分担します。その後、2人1組のペアを作り、管理部や銀行、運輸倉庫、商事会社、商店の役割を、それぞれに与えます。会社の建物に火災保険をかけたり、売り上げや仕入れなどの記録を残すための帳簿やパソコンのデータを作成したり、起業する時のことから一つずつ学びます。取引の記録がずれると、正しい利益や損害の情報などが分からなくなるので、正確に記帳するために何度もやり直しがあります。毎時間、仕事の内容が進んでいくので、休んでしまうと自分が困ることはもちろん、ペアの人にも迷惑がかかります。総合実践の授業を受けると、働くということの責任を学ぶことができるのです。

給料も実績によってそれぞれに違った金額が与えられるので、やりがいも感じることができます。

これら二つの授業では、仕事の大変さを知ります。辛いと感じた時、いつも祖父の顔が思い浮かびます。スーパーを運営する立場にあった祖父は、きっとたくさん大変な思いをしたと思うからです。

では、祖父はどうやってこんなにも大変なことを、生涯全うすることができたのでしょうか。今までの祖父の生き方を思い返してみると、それはきっと、愛があるからだと思いました。祖父には、妻や子ども、養わなければならない家族がいました。寄付という形で、恩を返したい街がありました。たくさんの本を読んで様々なことを学習してほしいと思う、これからの社会を担う子どもたちがいました。そういう思いが、祖父にはあったのではないかと考えています。私は、今までの経験から導き出した、こういった考察から、働くことは大変だけれど、世の中の働く人は皆、大切な誰かのために働いているのではないかと었습니다。そう考えると、社会はとてもあったかいと感じました。

私ももう高校3年生になり、進路について考えなければならない時期になりました。周りには就職する友達もたくさんいて、今まさに、履歴書などを作成している真っ最中です。私は4年制大学への進学を考えていますが、それは社会に進出する過程です。私も4年後には、働くことになるのです。辛いこともたくさん待っていることと思いますが、私は、ある目標を持っているので、きっと一心不乱に頑張ることができます。それは、誰かの笑顔を見るために働ける人間になるということです。祖父の姿を見て、お金のために働くだけでは、強い意志をもって働き続けることができないということを学びました。祖父から学んだことを糧に、これから働いていこうと思っています。

こうして立てた目標を全うして、祖父のような大人になるために、愛をもって働きます。

